

# 教育実習事前事後指導が及ぼす教育実習への 影響から見た効果と課題

— より良き教職教育の在り方を求めて —

In the health and physical education, Effect and Subject on pre-post satisfying instructions of practice teaching have an effected in the actual performance.

— The pursuit what a teacher teaching should be better. —

体育学部体育学科

大西 努

ONISHI, Tsutomu

Department of Physical Education

Faculty of Physical Education

体育学部体育学科

中尾 道子

NAKAO, Michiko

Department of Physical Education

Faculty of Physical Education

体育学部体育学科

久田 孝

HISADA, Takashi

Department of Physical Education

Faculty of Physical Education

**キーワード：**教育実習，資質向上，教員養成，自覚，覚悟

**Abstract：** The purpose is to clarify the present situation in practice teaching, to consider directions and improvements in future for educational supportive system of our university teacher training, according to questionnaires conducted by student teachers and consultant teachers who were in charge of practice teaching. The following is questionnaires items.

- (1) Activities and consciousness condition before practice teaching.
- (2) Activities condition during practice teaching.
- (3) Acquisition level of prior guidance in the school where student teacher spend teaching.
- (4) Prior guidance what the school where student teacher spend teaching expects.
- (5) It is consciousness reform in post guidance of our university.

In pre practice teaching-post practice teaching, there are significant differences between prejudice of student teachers and practical situation.

In post practice teaching, practical ability and applied ability of prior guidance make a great contribution to work off serious mental fear. therefore we acquired knowledge of improvement, further practical seminar is needed.

**要約：** 研究の目的は、本学保健体育科教員志望学生並びに教育実習校担当指導教員からの教育実習に対しての質問紙調査から、教育実習での実態を明らかにし、教員養成に於ける本学の今後の教育・支援体制に対し今後の方向性や改善点について、考察することが目的である。調査項目については、次の通りである。1) 教育実習前の活動、意識状況 2) 教育実習中の活動状況 3) 実習校から見た事前指導の修得度 4) 実習校が期待する事前指導 5) 本学が行う事後指導への意識改革である。結果、実習前と実習後では、学生の思い込みと、実際の実践の間では大きな差があり、実習後におい

ては事前指導の実践力、応用力の育成が学生への大きな心理的不安の解消に寄与するものであることが分かった。よって更に実践的演習に対する改善の知見を得た。

**Keywords** : practice teaching, improvement of quality, teacher training, awareness, readiness or preparedness

## 1, はじめに

わが国では教育、特に学校教育に対し国民の関心は非常に高い。こうした背景から常に教育改革の必要性が取りざたされ、様々な議論がなされている。昨今最近の傾向としては、教師の資質や能力の問題と共に、教師の実践力の問題に焦点が当てられてきている。特に、教員養成の過程段階では、学術的、専門的知識だけでなく、現場で児童、生徒と接していくにあたり、常に変わりつつある状況に対し如何に適応し対応していくかである。その学習過程が、教育実習にあると言っても過言ではない。

教育実習は、教育現場で教員志望学生が実践力を実際に身に付ける機会である。また、教員の実践力の向上を図る上でも、教職員免許法改訂（1998）修得単位の増加にて、実習期間をのぼすなどをみると実際に児童、生徒と関わる現場での経験や、時間が実践力に大きな影響を及ぼすことを意味していると考ええる。

教育実習に関する先行研究は、さまざまな角度からなされている。教育実習に対する制度、教育課程、カリキュラムに関する等の論理的なことによる研究が多いが、実際の教員志望学生の、実習生の教育実習における実習校での実習は、教育活動全般（ホームルーム、クラブ活動含む）について、観察、参加、実習により構成され、その内容については、それぞれの実習校の実情に即した、教育実習の指導計画が編成されている。

教科指導、生徒指導、学級運営、課外クラブ、教職員間の共通認識や、協働体制等から実際に実習生がもった、教育実習前後の意識の捉え方からその変容、反省など心理的变化の実態を実習生側から調査した研究は少ない。特に、保健体育科教員志望の学生がもつ実態については、ほとんどなされていない。

本研究は、保健体育科教員志望の実習生が、どのような意識で教育実習を捉え、実際の現場でどのように感じ、何を学び、何を経験したのか、学生の教育実習の感想、反省から大学が行う教育実習に対する事前・事後の指導がどのように生かされているのか。

また、日々変わりゆく学校現場の、多様化に対応するため、何を指導重点項目として考えなくてはいいな

いのか。実際に教育実習を終えた学生の視点から調査し、その実態をアンケートを通して考察することを目的としている。

## 2, 研究の方法

### 2-1 調査の概要

本学において、中・高保健体育科教員免許状取得を希望する学生で、教育実習を終えた学生106名、及び実習校指導教員33名に対し実習を終えた後、その状況について質問紙調査を行った。調査は、2013年5月に配布し10月全員が終了した時点で回収した。

実習校は基本的には、学生の希望とし、ほとんどの学生が母校に依頼をするが、実習校の都合上引き受けられない場合は、母校外での実習もあり得る。校種においても実習生の将来希望する校種とし、中学校、高等学校、中高一貫校、その他男子校、女子高、男女共学校とさまざまである。実習期間においては、中学校3週間、高等学校4週間が基本である。

### 2-2 調査項目について

- 1) 教育実習前の活動、意識状況
- 2) 教育実習中の活動状況
- 3) 実習校から見た事前指導の習得度
- 4) 実習校が期待する事前指導
- 5) 本学が行う事後指導への意識改革

各項目での質問に対する回答は、4件法を用いて行うが、状況や解決法を求める場合は、記述法も用いた。調査項目の作成には、教科教育法並びに教育実習事前事後指導の教員と選別、作成に至った。

## 3, 調査結果と考察

本研究で、調査結果を①教育実習に対する意義、②教育実習前の心理的状态③教育実習中の授業実践④大学が行う教育実習を受講するための指定科目（教育実習事前事後指導を含む）の効果と課題の視点に着目し考察する。また記述回答においては、キーワードを選出し整理する。

### 3-①教育実習に対する意義

教育実習前に何故教育実習に行くのか、実習生が捉える教育実習に対する意義や想い、考えについて尋ねたところ表1の結果が得られた。

表1 あなたは何故教育実習に行くのですか

回答	実数	%
教師になるため	53	50.0
教員免許取得だけの為	44	42.0
単位取得だけの為	9	8.0
その他・無回答	0	0

教育実習に対し実習生は、教師になるために行くものであると答えたものが半数であると同時に、免許取得の一連の流れ、または学士取得の単位取得としての捉え方が半数弱をみると、教師を夢見入学から実習までに、学習過程の中で夢実現の意識は低くなると共に、記述の回答を見ると、教師としての夢は持ったものの、学習過程で不安要素が重なり、自分が教師として向いているのか適性に不安をもち、この教育実習を実際に行うことにより、教師が自分に向いているのか、能力があるのか、また本当に自分は教師になりたいのかを、試す機会と共に、教師にならなくても教員免許状だけは取得しておきたい、資格取得感覚で教育実習を捉えている学生がいることが分かった。学生の意識を理解するところに、教育実習の意義づけの重要度を感じる。

### 3-②教育実習前の心理的状态

教育実習に対して、実習生は実習前にどのような気持ち、精神状態であるのか、実習生が初めて教育現場に行く前の気持ちについて尋ねたところ、表2、表3の結果が得られた。

表2 あなたは教育実習を楽しみにしていますか

回答	実数	%
楽しみにしている	80	75.4
まあまあ楽しみにしている	11	10.4
楽しみにしていない	15	14.2
その他・無回答	0	0

表3 あなたは教育実習に対し夢をもっていますか

回答	実数	%
しっかりと夢をもっている	50	47.1
漠然した夢はもっている	25	23.6
夢はない	27	25.5
その他・無回答	4	3.8

ここでは、心理的な要素として期待と不安について考えてみたい。表2、表3の期待については、約8割の実習生が、何らかの楽しみを期待している。記述回答によると、大きく二つに分けることが出来る。

一つが、自分を高めることに対する期待。二つ目が生徒、教師とのコミュニケーション関わり合いに対する期待である。前者に関していうと「教育実習を通して、何か自分を変えるきっかけになると思う」「実践を通じて自分を変えるきっかけになると思う」「今までの大学で学習したことを、活かせる機会である」「教師としての苦労や、遣り甲斐などを身を以て体験し自己の成長につなげたい」「実際の現場で人に教えることの大切さ、生徒との接し方が知れる」「教師がどのような仕事をしているか知る機会」「生徒の成長を身近に知る機会」「教師と言う夢に一步近づける」「教員を目指すうえで必要な資質、能力を養う」「自分の力を試す」「体育嫌いな子どもを体育好きにさせる」「生徒と共に歩み成長したい」「教員として自分をどれほど磨けるか知る機会」愉しみのほとんどが、現場で起こることを吸収する事であった。

後者の生徒、教師とのコミュニケーション関わり合いに対する期待については、反対に自らの能力をコミュニケーション、関わり合いを通じて授与したい、与えたいと考えていることである。これは、児童・生徒・学生時代に、教師から得た良き経験が、相乗効果として同じ想いをさせることをしたいとの欲求が、教育実習を楽しみとさせている。記述回答は以下の通りである。

「自分の発言した言葉が生徒の心に残り、実践してくれるかもとの期待」「自分の苦労や経験などを伝え、少しでも役立ててほしい」「生徒が楽しく過ごし、学び合いたい」「自分が教師になりたいと思ったように、自分も教師になりたいと思わせたい」と共感的な発想から来た者が多く見受けられた。

しかしながら、表2、表3の楽しみや夢をもつ傍ら、その期待が本当に達成することが出来るのかとの不安が、表4、表5でうかがえる。

表4 あなたは教育実習に対し準備は万全ですか

回答	実数	%
万全である	10	9.4
まあまあ万全である	64	60.4
あまり出来ていない	32	30.2
その他・無回答	0	0

夢や希望はあるが、実際の実践の場で夢や期待は自

分の資質や能力で達成出来るかと振り返ると、そこには不安の材料が現れている。表4では教育実習に対し、準備は万全かとの質問に、万全は1割まあまあ万全とは、6割と半数が意識の中で足りないところを理解、認識している。また、3割の実習生は準備があまり出来ていないとの認識で教育実習を行うことになる。その準備から見た不安が表5のような結果となる。

表5 あなたは教育実習に不安を持っていますか

回答	実数	%
不安である	81	76.4
少し不安である	12	11.3
まったく不安ではない	13	12.3
その他・無回答	0	0

表4のように習得してきた学習の積み重ねと、夢や希望を合わせると出来ているような錯覚に陥るが、不安文字が出ると、一気に心理的不安度は増し、表5でわかる通り、不安と思った実習前に約8割強の実習生が、何らかの心理的不安を抱えていることが分かった。

その不安項目については、記述式回答で次の事がある。多い順に「①授業が満足にできるかが不安」「②指導案が書けるか、その通りにできるかが不安」「③生徒指導が出来るかが不安」「④一般常識がないので馬鹿にされるのではないかと不安」「⑤生徒や、教師と人間関係がうまく出来るかが不安」それ以外に、身体的精神的疲労、生徒の顔が見れるか、大きな声が出せるか、笛を吹くことが出来るか、集会など集団を整列させることが出来るか、指導教官に叱られたらどうしよう等の不安である。

このような心理的不安要素を抱えつつも、実習生はそれらを乗り越え教育実習を行っていく。このような心理的不安を解消する機会として、教育実習事前指導が行われる。事前指導は、事後指導と合わせて通年で行われる。教育実習で必要な知識や技能、その方法や動機づけ等、習得観から心理的不安を取り除くことを行う。では、実際に教育実習を終えて事前指導がどのように役立っているか、効果と課題について考えてみる。

### 3-③教育実習事後アンケートから見た教育実習中の授業実践

表6 教育実習はあなたの思った通りでしたか

回答	実数	%
思った通りであった	30	28.3
まあまあ思った通りだった	10	9.4
思った通りでなかった	65	61.3
その他・無回答	1	1.0

教育実習を終え、夢と期待が実際とどのような差異があったか、表6のような結果が示された。

半数以上の6割が、思った通りではなかった。また3割は、思った通りであったとあるが、記述式の回答には、思った通りであったは、「授業が出来なかった」「指導案が書けなかった」「生徒とコミュニケーションが取れなかった」「先生の言っていることがわからない事ばかりであった」「予想と現実には違いがありすぎた」「やはり学校が快く受け入れてくれなかった」等であり、思った通りでなかったでは、「母校だから喜んで受け入れてくれると思っていた」「生徒が自分にまわりついてきてくれると思っていた」「歓迎会や飲み会など教師集団の一員として行動できると思っていた」「自由に授業をさせてくれなかった」等、前者も後者も基本的には、思い込みによる期待外れが大きな要因となっている。

しかしながら、表7からは夢や期待とは反対に、教育実習に行って大変良かったが全体の7割を占め、表8の教師になりたい気持ちの高まりについては、高くなったり、変わらず教師を目指す実習生は8割強にも及ぶ。

表7 教育実習に行って良かったですか

回答	実数	%
大変良かった	74	69.8
まあまあ良かった	31	29.2
良くなかった	1	1.0
その他・無回答	0	0

表8 教師になりたい気持ちは高まりましたか

回答	実数	%
高まった	63	59.4
変わらない	25	23.6
逆に低くなった	16	15.1
その他・無回答	2	1.9

では何が表7、表8の気持ちを高めたのか、記述式回答を見ると、「自分の出来ていないことがわかって



良かった」「現場の様子、厳しさが分かってよかった」「現在の自己の力を知ることが出来て良かった」「実際の大学での講義や模擬授業とでは全く違い学ぶことが多くあった」「さらに教師になりたいと思った」等、表8の教師になりたい気持ちの高まりからは、教育実習で得た、「教師の魅力を肌で感じた」「遣り甲斐を感じた」「叱られても自分は教師に向いていると思った」のように考えをポジティブな方向に変えていくなど、大学の講義だけで身に付けたものではなく、実習生自身のモチベート、また教育実習と言う教育現場の中で身に付けて行ったものであり、教育実習が大きな心理的不安を軽減している。

心理的不安には行動を起こす前の不安と、行動を起こしてから起こる不安がある。教育実習の最中に起こる心理的不安として、表9、表10の質問をした結果以下のことが示された。

表9 実習中困ったことはありましたか

回答	実数	%
困ったことがあった	62	58.5
困ったまではいかなかった	10	9.4
困ったことはなかった	33	31.1
その他・無回答	1	1.0

表10 実習中注意、叱られたことはありましたか

回答	実数	%
叱られた	35	33.0
注意は受けた	20	18.9
叱られなかった	44	41.5
その他・無回答	7	6.6

表9の困ったことは約7割が何度か困った経験をしている。記述式回答では、そのほとんどが、教材研究、学習指導案の作成、授業等の教科指導関係と、生徒対応の仕方や教員との対応などのコミュニケーションで、まさに今、教員の実践力の育成に関係している。

実習中注意、叱られたことは、半数の実習生が注意や叱責を受けている。その内容は様々であるが、実習生としてまた大学生としての、常識にまつわることが大半であった。これも教員の資質向上に大きく関係している。

では、教育実習を終え事前指導は、どのような効果があり、課題が発見されたのか、表11、表12を見て評価を見つきたい。

表11 実習中大学で習っていないことはありましたか

回答	実数	%
習っていない事ばかり	35	33.0
習っていないこともあった	10	9.4
すべて習っていた	59	55.7
その他・無回答	2	1.9

表12 実習で大学の学びは生かされましたか

回答	実数	%
生かされた	24	22.6
まあまあ生かされた	43	40.6
生かされなかった	37	34.9
その他・無回答	2	1.9

表11 実習中大学で習っていないことが3割あるが、すべて授業に関する事である。「保健分野の知識」「実技の授業方法と補助」「指導案について（文章の書き方、まとめかた）」などであり、学んできたことは実際の現場で生きたのかに対しては、生きたことは約6割あるが、3割の生かされなかった理由に、机上の空論で終わっていることも多く、実際の現場で使えないことも多々あった。

では、実習生から見た事前指導はどのように感じているのかは、表13の結果で示された。

表13 教育実習事前事後指導は役立っていますか

回答	実数	%
大変役立っている	66	62.3
まあまあ役立っている	30	28.3
役立っていない	10	9.4
その他・無回答	0	0

基本的には、半数弱の者が役立っていると感じているが、役立っていない者が3割いるが一概に結果を鵜呑みすることは避けて考えたい。

それは、大学の一方通行的な講義と、現場での双方通行的な教育活動との間にあるが、教育実習の事前事後指導では、複数の教員にて学生の指導に当たる担当制を敷いている為、受講人数も少なく、学生の活動が主となって行く事から、実践的なスキルについては評価されているものと感じる。

今までは、教育実習生自身の問題として、教育実習の事前指導から実施後までの状況を追ってきたが、実際に教育実習生を指導する側の期待と課題について焦点を当ててみたい。

表14 実習は到達目標に達しましたか

回答	実数	%
達した	6	18.2
まあまあ達した	21	63.6
達せなかった	6	18.2
その他・無回答	0	0

到達目標については、実習担当教員の主観となっているが、ほぼ8割が目標に達している。これには、母校での実習が多く、過去指導になった教員との関係、卒業生としての関係も影響した結果と考えられる。

表15でいう心構えとは、記述式回答のほとんどが大学生ではなく、一教員としての自覚であったり、申し込みから事前打ち合わせ、実際に教育活動を行うに当たっての社会人としての常識、マナーを焦点としての評価である。出来ていないところは積極性であり、指示待ちの人間に対しては出来ていなかったと評価。

服装については、流行を追うようなスタイルが多く出来ていなかった教員としては不適切と判断。

表15 実習生の心構えはできていましたか

回答	実数	%
出来ていた	11	33.3
まあまあ出来ていた	14	42.4
出来ていなかった	8	24.3
その他・無回答	0	0

表16 実習生の出勤、服装は場に合っていましたか

回答	実数	%
出来ていた	25	75.7
まあまあ出来ていた	5	15.2
出来ていなかった	3	9.1
その他・無回答	0	0

表17 実習生は挨拶、言葉遣いなど含むコミュニケーションが図れていたか

回答	実数	%
出来ていた	13	39.4
まあまあ出来ていた	16	48.5
出来ていなかった	4	12.1
その他・無回答	0	0

表18 実習生は満足な学習指導案を書けていましたか

回答	実数	%
出来ていた	3	9.1
まあまあ出来ていた	10	30.3
出来ていなかった	20	60.6
その他・無回答	0	0

学習指導案に関しては、指導案を作成するまでの文章力大きな影響を含んでいる。頭で考えていても、それを文字にする表現法に問題があり、記述式回答において、国語的学習能力を指摘されることがほとんどであり、事前指導の段階で、教科指導に時間が取られ国語的指導がなされていないことが、この結果を招いていると考える。

同時に授業での板書作成力にも影響が出ている。特に実技では問題ないが、出来ていなかった4割は保健の授業に、その課題が残った。

表19 実習生は満足な授業が出来ていましたでしょうか

回答	実数	%
出来ていた	8	24.2
まあまあ出来ていた	12	36.4
出来ていなかった	13	39.4
その他・無回答	0	0

専門外指導としては、学級経営、生徒指導など表20、表21の結果に示されたように保健体育科においては、専門教科に時間が多く費やされ、事前指導の段階で到達目標までいけていない結果が表れている。特に道徳が教科化されようと検討されている中、学級経営と道徳教育の指導の時間数の拡大は必要と考える。

表20 実習生は道徳の授業が出来ていましたでしょうか

回答	実数	%
出来ていた	1	3.0
まあまあ出来ていた	2	6.1
出来ていなかった	4	12.1
その他・無回答	26	78.8

表21 実習生の生徒指導はできていましたでしょうか

回答	実数	%
出来ていた	8	24.2
まあまあ出来ていた	10	30.3
出来ていなかった	15	45.5
その他・無回答	0	0

表22 実習生の学級活動はできていましたか

回答	実数	%
出来ていた	10	30.3
まあまあ出来ていた	16	48.5
出来ていなかった	2	6.1
その他・無回答	5	15.1

### 3-④大学が行う教育実習を受講するための指定科目(教育実習事前事後指導を含む)の効果と課題

教職課程科目及び教育実習事前事後指導について効果と課題、改善を含め考察してみる。

大学における教育実習関連科目は、多種多様である。指導する大学の教員側は、その専門分野を学生に対し指導・理解させようとしている。

一方学生側は、教員免許取得の為に必要な科目として履修を行っている。ここで、教員側と学生側に共通している事は、多くの科目が縦割りになっており、学生側が、この縦割り内容を融合して理解しなければならないことである。この縦割り専門科目を、いかに融合させ関連づけるかが、大きな課題と考えられる。

更に、質問紙調査の回答から共通して考えられるのは、実践的能力の育成、実際現場で行われていることのシュミレーションであったり、問題事項に課する演習、発表、学生同士のディスカッションなどの自己表現、プレゼンテーション能力の育成を重点に、机上での学習にとどまらず教育実習に役立てるようにすることが必要である。

## 4. おわりに

本研究では、実際に教育現場を経験した「実習者側」の視点と、その実習者を指導した実習校の指導教員の視点から、教育実習の実態について、より現実的な実態が明らかになり、これを基に今後の教育実習に関係する、教職課程科目及び教育実習事前事後指導の在り方について検討したい。

### 1 教職授業と教育実習のリンク

### 2 保健体育科教育法Ⅰ～Ⅳを設定

#### Ⅰ教科教育法

#### Ⅱ実技

#### Ⅲ指導案、模擬授業

#### Ⅳ教育実習事前事後 教育実習

として一連の流れを設定、一貫したカリキュラムを設定することが求められる。

また、基礎学力、基礎知識、一般常識等の、授業の必須化も検討の必要性が考えられる。

要はただ単に、教育実習に出すための教職課程の授業となるのは問題であり、理論と実践を関連付けたカリキュラム内での、バランスが大切と考える。

本学は、将来教育現場で教員になろうと、夢実現の

為に入学してくる学生が多く在籍している。

採用されて現場の教員となり、過酷な毎日を見学や生徒、更には保護者との対応、事務処理等、教育実習期間だけでは経験できない過酷な現実の連続である。

また、大きな柱である授業の実践は、直面する児童や生徒に取っては、担当する教員の資質に大いに影響される。

教員になろうとする学生は、相当な覚悟と実践力を、兼ね備えていなければならない。現場に出る前に試行できるのは、ほんの数週間である。

近年では、初任者研修制度が確立され、初任者教員に指導教員が張り付けられ、多方面に亘って指導してくれる機会がある。しかし、基礎的・基本的な部分は、大学で指導しなければならない。

教育実習関連科目の相互の関係性と履修時期について、今後の大きな課題といえる。

更に、教育実習に行く学生自身の資質向上についても、合わせて総合的に指導しなくてはならない。

昨今、最も教育現場で管理職が追及する教員像は、「生徒を、管理できる能力」である。教えられる立場から、教える立場に進化しなければならない学生にとって、日々の行動の偏差値を上げることも重要である。

この研究に於いては、本研究は教育実習の今後のあり方についての調査段階としてのものであり、今後引き続き本研究を発展させていくものとした。

## 引用・参考文献

浅田匡・生田孝至・藤岡完治編著(1999)『成長する教師』金子書房

有吉英樹・長澤憲保編著(2001)『教育実習の新たな展開』ミネルヴァ書房

石橋裕子・梅澤実・林幸範編著(2011)『教育実習ガイド』萌文書院

石村卓也著(2008)『教職論』昭和堂

石村卓也著(2009)『教育課程』昭和堂

菊池定則著(1979)『教育実習 実態・指導・課題』第一法規出版

小山茂喜著(2010)『教育実習安心ハンドブック』学事出版

佐々木正治編著(2011)『新教育原理・教師論』福村出版

佐藤晴雄著(2011)『現代教育概論』学陽書房

中央教育審議会答申(2012)教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について

藤田哲也編著（2010）『絶対役に立つ教育心理学』ミ  
ネルヴァ書房  
文部科学省（2008）中学校学習指導要領解説保健体育  
編  
文部科学省（2009）高等学校学習指導要領解説保健体  
育編  
山崎英則・片上宗二編集員代表『教育用語辞典』ミネ  
ルヴァ書房